

順正学園
ボランティアセンター 通信

VOLUNTEER CENTER OF JUNSEI EDUCATIONAL INSTITUTION

開設10周年を迎えた順正学園ボランティアセンター。これからも学生たちの力で、より多くのボランティア活動に励みます（下写真は10年前、除幕式を行う開設当初のセンター）



vol. 7
2011.12

吉備国際大学ボランティアセンター
吉備国際大学短期大学部ボランティアセンター
順正高等看護専門学校ボランティアセンター

〒716-8508 岡山県高梁市伊賀町8 TEL:0866-22-3548/FAX:0866-22-3591
E-mail: volcen@office.jei.ac.jp
ホームページURL:http://kiui.jp/pc/campus/volunteer_c.html
ブログURL:<http://volvolblog.blog114.fc2.com/>

九州保健福祉大学ボランティアセンター
九州保健福祉大学総合医療専門学校ボランティアセンター
〒882-8508 宮崎県延岡市吉野町1714-1
TEL : 0982-23-5576/FAX : 0982-23-5570
E-mail : nontani@office.jei.ac.jp
ホームページURL:<http://www.phoenix.ac.jp/volunteer/>



特集1 1~10
CONTENTS 開設10周年記念特集

特集2 11~16 東日本大震災被災者支援プロジェクト

特集3 17~20 九州保健福祉大学ボランティアセンター
災害ボランティアへの挑戦!!

21~24 ニュース&トピックス
25~26 センター報告
27~30 学生のページ

順正学園ボランティアセンター 開設10周年記念特集

「ボランティア国際年」の2001年9月。福祉教育と奉仕の精神が根付く、この高梁の地に「高梁学園ボランティアセンター」が初めて産声を上げました。
 それから10年——。現在は順正学園ボランティアセンターに改称し、災害復興支援、地域貢献、国際貢献、障がい学生支援の4セクションを柱として、高梁・宮崎の両キャンパスで地域に密着した特色あるボランティア活動を展開しております。
 今回のセンター通信は、10周年の節目を祝う記念特集号。ゲストに菅波茂AMDAグループ代表をお招きし、加計美也子センター長との対談などを通して、センターの10年間の歴史と発展の歩みを紐解いていこうと思います。

順正学園ボランティアセンター開設10周年に寄せて

順正学園ボランティアセンターは、我が国において、行政セクターや企業セクターによる働きに併せて、ボランティア、NPO、NGOといった市民による自発的活動が、社会を支える第3のセクターとして期待される中、ボランティア国際年の2001年9月に開設してより、10周年を記念する運びとなりました。これも一重に、地元高梁市をはじめとする関係諸団体の皆様方、そして賛助会・助成団体の皆様方のご支援ご協力の賜物と、心より厚く御礼申し上げます。

さて、この10年を顧みますと、開設年次は、順正誕生120周年の年であり、ここ高梁に、県内初の女子高等教育機関である順正女学校を創設された、教育と福祉、開発と女性(WID)のパイオニアである福西志計子をはじめ、児童福祉の父で



●順正学園ボランティアセンター長

加計 美也子

ある石井十次といった先人達の偉業や精神を顕彰し、ボランティア活動のあり方をテーマとした、岡山と宮崎を結ぶリレーシンポジウム「岡山から広がるボランティアの輪～児童福祉の父石井十次～」・「日向から広がるボランティア精神～児童福祉を拓いた石井十次の事績に学ぶ～」を開催したことが思い出されます。

また、これまでに本センターは、災害復興支援・地域貢献・国際貢献・障がい学生支援の4セクションを柱として、美作市、兵庫県作用町の豪雨水害による復旧活動やイラク救援物資ボランティア、東日本大震災をはじめとする国内外の災害復興募金活動、地元高梁市との合同ボランティア活動や各種イベントへの学生・講師派遣、講義等のノートテイク支援など、21世紀の福祉社会の実現に向け、関係機関との連携を図りながら、その活動に取り組んで参りました。本センターの10年にわたってのボランティアに関する学術的な活動や救援活動を通して、学生や教職員も大きく成長させていただき、本センターもボランティアの拠点としての役割を着実に担っていると思っております。

今後も、順正学園ボランティアセンターは、ボランティア活動における学術的な発展と地域社会に貢献できる人材養成に努めて参る所存でございますので、皆様方からの変わらぬご支援ご協力を、切にお願い申し上げまして、開設10周年に寄せての挨拶とさせていただきます。

順正学園ボランティアセンター開設10周年に寄せて

順正学園ボランティアセンター設立10周年を心からお祝い申し上げます。

「欧米の若者が遠く離れているアジアでボランティア活動をしている。日本の若者にボランティア精神はないのか」と日本のメディアが世論形成したのが、1978年にカンボジア難民がタイ国に大量に脱出した時でした。ボランティアという言葉が初めてメディアによって日本社会に紹介されました。私も2名の岡山大学学生と共に、タイ国にあるカオイダン難民キャンプを訪れました。「善意があつても何もできない現実」と直面しました。AMDAの前身であるAMSA(アジア医学生国際協議会)を設立する契機となりました。

1995年に発生した阪神大震災に100万人のボランティアが参加しました。メディアは「ボランティア元年」と命名。2011年3月に発生した東日本大震災に、すでに800万人が救援および支援活動に参加しています。金融資本主義の崩壊しかかっている現状に、大きな影響を与えました。お金志向から人間の絆志向に価値観が変わってきています。人間の絆とは「喜びの共有」です。一方、欧米では若者の暴動が発生しています。この差は何なのでしょうか。いずれにしろ「喜びの共有」という価値観が、21世紀の世界を先導すると信じています。

人の喜びには3つあります。「自己実現の喜び、自己表現の喜び、感謝の喜び」です。ボランティア活動はいずれの喜びにも関係します。ただし、援助を受ける側にもプライドがあります。プライドとは「自分も人の役に立ちたい、社会の役に立ちたい」気持ちです。喜びの形は「ありがとう」の言葉です。援助する側が援助を受ける側に「ありがとう」と言える双方向のボランティア活動が、本当のボランティア活動です。智慧(ちえ)が必要です。

順正学園ボランティアセンター設立10周年から20周年へと、「ありがとう」の言葉がますます飛び交う状況へと発展されることを、心からお祈り申し上げます。

●菅波代表プロフィール

1946年12月29日生まれ。広島県福山市神辺町出身。岡山市在住。特定非営利活動法人AMDA理事長、公設国際貢献大学校名誉校長を務める。



●AMDAグループ代表

菅波 茂

順正学園ボランティアセンター 開設10周年とボランティアのこれから

加計美也子センター長（左）、菅波茂AMDAグループ代表（中）、保積功一吉備国際大学副学長（右）

保 積：本日は、順正学園ボランティアセンター開設10周年記念特集をいたしました。加計美也子センター長、菅波茂AMDAグループ代表のお二人をお迎えし、特別対談を企画しました。お二人には、それぞれのお立場から、実際のボランティア活動の取り組みなどを交えて、社会におけるボランティアの役割や意義、期待感…そして、それぞれの今後の活動方針や展望などをお話いただければと思います。コーディネーターは私、吉備国際大学副学長・保積功一が務めさせていただきます。まずは、菅波代表から、当センターの開設10周年に対して、何かメッセージをお願いいたします。

菅 波：まさしく、10年ひと昔ですよね。けれど、10年といったら、もうセンターが形として固まってこられた頃でしょう。こういうボランティアセンターというのは、官公立の大学では、なかなか出来にくいと思います。私立だからこそトップの決断で、ユニークかつ時代を見越したボランティアセンターを作ることができます。やはり時代の流れを見越した上で…世の中がどう変わるのが、そして、自分の大学の学生にどういう人間形成をしてもらいたいのか。そうした視点から、このボランティアセンターは作られたと思うんです。要するに、文部科学省が認めた従来の枠の中でやっていかなければならないというのが、日本の教育の限界だったわけです。しかし、それを超えたところ…私学の理念に基づいて作られたのが、ボランティアセンターなのではない



いでしょうか。

ただ問題は、センターが10年間で尻っぽみになったのか？それとも、ますます大きくなっていたのか？というところです。私が見る限り、確実に大きくなっていますから…やはり、加計センター長の10年先を見通した先駆性が立証されたということでしょう。

保 積：ありがとうございます。続きまして、加計センター長に10周年を迎えたご感想をお伺いしたいと思います。

加 計：当時、ボランティアやNPO、NGOといった市民による自発的活動が、社会を支え市民セクターとして期待される中、順正学園ボランティアセンターは2001年の「ボランティア国際年」に開設いたしました。それ以来、10周年という節目を迎られましたのも、菅波代表をはじめとする関

係諸団体や地元高梁市、近隣自治体の皆様方、そして賛助会・助成団体の皆様方のご支援ご協力の賜物であると、厚く御礼申し上げます。

本センターはこれまで、数多くのボランティア活動や、ボランティアに関する学術的な活動を通して、大きく成長させていただきました。今や、近隣地域におけるボランティア拠点としての役割を、着実に担っていると自負いたしております。特に喜ばしいのは、学生たちの成長ぶりです。それぞの分野…災害復興支援、地域貢献、国際貢献、障がい学生支援といった主要分野での動きが、非常に素早い。今回の東日本大震災でも翌日から募金活動に取り組むなど、自然発展する学生の活動を、私は一番嬉しく感じております。

保 積：ボランティア活動に対して、学生がものすごく大きな影響を与えるということですね。今、加計センター長のお言葉に

あった、学生のボランティア活動が「自然発展していく」というのが、すごいと感じました。また、そこからボランティアセンターの役割が何であるかも、見えてくるのではないかでしょうか。

菅 波：私の見方は少し違っていて…例えば、加計グループというのは、九州にも学校があり、多種多様な学生教育のユニットをお持ちです。そこで、そのグループ全体の精神や一体感というものを、どう出していくのか？というのが非常に大きな問題になると思うのです。その答えの一つが、ボランティアセンターの存在ではないかと考えます。グループの一体感を出すには、一つに「創設者の理念」があります。しかし、現実には様々な学生や職員が入って来る中、実際に理念だけで一体感を持たせるのは難しい。そこで、もっと皆が共有できるもの…誰しもが持っている「他人の役に立ちたい」という気持ちを、一体感として結び

付けるのが、ボランティアセンターの役割だと思うのです。

順正学園だからこそ、
ユニークかつ時代を見越した
ボランティアセンターを作ることができた

それと、もう一つ、人の役に立ちたいという意欲と能力があっても、チャンスが与えられなければ自己実現はできません。このチャンスとは何かというと、お金か社会的ポジションです。ボランティアセンターというのは、人の役に立ちたい気持ちを持つ学生に、社会的ポジションを与える役割を持っているのです。これは、人にチャンスを与える側のモラルの問題もあります。意欲と能力がある学生がいるにもかかわらず、チャンスが与えられなくて自己実現ができない。これは、チャンスを与える側の人が「不作為の差別」を行っていると言えます。

だから、ボランティアに参加する人がどうだったかというよりも、世の中で他人にそういうチャンスを与えられる可能性を持っている人が、逆に問われているのだ…という視点を持った方がいいと思いますね。

保 積：NPO法人AMDAは昨年、本部を移転（岡山市北区伊福町）し、新たなスタートを切られました。そんな中、3月11日、未曾有の東日本大震災が起ったわけですけれども、世界規模でも活動されるAMDAが、被災現場で、実際にどう動かれたのか教えていただきたいのですが。



自然発展する学生たちのボランティア活動が、
何より一番嬉しく感じます

菅 波：まず、今回の東日本大震災で、国際社会が日本に関心を持った点の一つに「なぜ避難所で暴動が発生しないのか」ということがありました。それは、地域の「町内会」が避難所を管理したのがポイントです。

町内会というのは、欧米にはない日本独自のもので、その地域の行政とコミュニティを結ぶ重要なボランティア組織であると言えます。東日本大震災のような存亡の危機に瀕した時、町内会がお世話するか



ら、皆の信頼の秩序が保たれるのです。なぜなら、町内会は信頼と人柄で選ばれた人たちが役員として参加しているからです。これは、非常に大きな日本の財産であると言えます。

今回、私たちAMDA自身の関わり方は、避難所に直接出向いて、泊まりこみで対応しました。これが一番、被災者の方々に喜ばれます。こうすることで、避難所の人たちが、どのように生活しているかが分かるんですね。避難所では、朝はおにぎり一個、夜はヨーグルト一個とか…そういう生活をしていました。でも、町内会の下、お互いに助け合ってやっているわけですよ。そういう極限状態においても、ちゃんと秩序が保たれている。その姿はもはや、感動ですらありました。

そして、翌日の3月12日には、すでに被災地である仙台に入りました。その後は北上し、15日に釜石市と大槌町。18日には南三陸町へ。また、南相馬市へも出向き、AMDAグループとしては、福島と宮城と岩手の三県を、カバーしたという形になりました。

その中で、今回の一番の問題点は何だったかというと…岡山から800キロ離れた岩手県に、どんどん医療チームを送り込むわけでしょう？その際、補給

をどうするのかというのが、一番のポイントでした。だから今回、自衛隊以外の、補給が出来ない民間の医療チームは、ほとんど被災地に入れていないのです。

では、なぜAMDAにそれができたかというと、うちはいつも海外で活動している。だから、常に補給体制のことが頭にあるわけです。800キロも離れていたら、食料などの補給体制は、自分で確保しなくてはなりません。自己完結が出来ない組織が被災地に入ってしまうと、助けるつもりが、反対に迷惑をかけてしまうことになってしまいますからね。

保 積：加計センター長にもお伺いします。順正学園ボランティアセンターは今回の震災に対して、具体的にどう関わっていったのでしょうか？

加 計：まず、ボランティアの重要性とその必要性が本格的に

認識され始めたのが、平成7年に起きた阪神淡路大震災だったと思います。当時、学園にはまだボランティアセンターはありませんでしたが、学生たちは自分たちの自由意志で被災地に出向き、様々なボランティア・救援活動に取り組みました。

当時、私も「うちの学生もなかなかやるじゃない」と、ただただ感心していただけでした。しかし、今回の東日本大震災では、阪神淡路の教訓を活かし、ボランティアセンターを中心とした活動が出来たと思います。

震災の翌日には、ボランティアセンターの呼びかけで募金活動が始まり、教職員をはじめ、海外の教育交流協定校などからも多額の義援金が寄せられました。学生たちも積極的に街頭募金に立ち、そのおかげもあって計400万円もの義援金をAMDAをはじめとする震災復興機関に手渡すことが出来ました。また、教職員や学生から救援物資を募り、集まった物資を公設国際貢献大学校（新見市）に搬送。同時に、同大学校に寄せられた物資の仕分け作業などもお手伝いさせていただきました。

加えて、岡山県初の女子高等教育機関である順正女学校を創設された福西志計子をはじめ、我が国の児童福祉の父である石井十次、留岡幸助といった先人達のボランティア精神が息づく地・高梁市にボランティアセンターがあればベストだと考え、平成13年9月、高梁学園（現・順正学園）ボランティアセンターを設立するに至ったわけです。

保 積：それでは菅波先生、これから若い人に向けて、ボランティアの社会的な意義や役割についての提言をお願いできますか？

菅 波：他人の役に立ちたいという気持ちも、誰でも持っています。この気持ちはとても大切なんですけれど…忘れてはいけな

行っています。

実際に、現地に直接赴きたいという学生たちも大勢いたんですが、震災直後はボランティアが現地に入っても混乱するだけです。そのため今回は、学園に居ながら、お手伝い出来るボランティアに力を注ぎました。

保 積：今回の震災対応は、ボランティアセンターがあったおかげで、スムーズに出来たということですね。では、もう少しセンターを大学に立ち上げられた理由と、その重要性についてお話をいただければと思います。

加 計：これもやはり、先ほども述べたように、阪神淡路大震災の経験がきっかけとなっています。先ほども述べたように、同震災では多くの学生ボランティアが様々な救援活動に参加しました。しかし、この経験により、私は単なるボランティアによる活動では、大きな貢献ができないということを実感しました。つまり、医者や看護士など、高度な専門知識を有する者、あるいはボランティアをコーディネートできる者等、それぞれの役割の果たせる人材が、このような緊急救援活動では必要性が高いことを認識せざるを得なかったのです。

そこで、私どもの学園におきましても、こうした人材の育成を行うことが、ひとつの使命であると考え、吉備国際大学の社会福祉学部に、現在の国際ボランティアコースの前身であります福祉ボランティア学科を設置したわけです。我が国におきましては

当時、このような体

系的なボランティア教育を行う大学はなく、極めて先駆的な取り組みであったと考えております。

このほかにも、原発被害の大きかった福島県から、高梁市の民宿に避難してきた児童たちを、学生がお世話させていただくボランティアを実施しました。また、同じく福島県浪江町の小中学校に対して、津波で流された学校図書を贈るプロジェクトや、高梁市に避難してくる被災者の方々が入居する家屋の清掃活動など、今回、当センターが率先して行ったボランティア活動は、どれも注目を浴びています。学園全体としても、高梁市と連携して、震災特別入試を実施するなど、被災者の受け入れを積極的に

いのは、ボランティアの援助を受ける側にもプライドがあるということだと思うんです。

阪神淡路大震災の時、ある関西の大学生が授業を休んで、何か月も被災地でボランティアに携わった。すると最後には、被災者の方に「もう、ええ加減、帰ってくれんか？」と言われて、非常にがっくりきたという例がありました。大学生は「自分たちは一生懸命やってあげているのに、どうして…」と、ものすごいショックを受けたというのです。実は災害などの際、一方的に援助して、被災者の方にばかり「ありがとう」という感謝の言葉を言わせる…こうした関係が最も良くないんです。

誰かが困っている時に助けてあげる人間関係にはフレンドシップと、スポンサー・パートナーシップの3つしかありません。この中で、パートナーシップという協力関係だけが、お互いに困難をともにするため、双方向で「ありがとう」という感謝の言葉が必要になってくる。こうした中から生まれてくる、お互いへの尊敬と信頼が、ボランティアをする側とされる側の共存共栄を可能にするんです。

ですから、今回の東日本大震災では、私たちは早い段階で、被災地に雇用関係を早く持ち込みました。雇用関係というのは、最も分かりやすいパートナーシップです。肝心なのは、津波被害などで財産をなくした被災者にボランティアをさせてはいけないということ。彼らの尊厳を取り戻すには、私たちはあなた方を必要としています、ということを実感させる雇用関係しかない。同時に、現地の人を雇い入れることで、より細やかで行き届いた救援活動をスムーズに行なうことが出来ます。この二つの意味で、被災地に雇用を持ちこむのは非常に意味があることだと思います。

やはり、人間の尊厳やプライドをきちんと確保するには、金銭も必要です。雇用と金銭、ボランティアは対極にあるように思えますが、こういう非常時には、町内会の役員や消防団など、すぐ有給に切り替えることが大切です。ただし、ただ金銭を配るのではない…ちゃんとした名目のお金で雇うという形が一番、理想だと思います。ボランティアをする時もまた、人権とは何か？差別とは何か？人間の尊厳やプライドとは何か？という、人間にに関する基本的なコンセプトをしっかりと叩き込んでおくと、現場で応用が利くわけですね。

保 積：それでは加計センター長、ボランティアセンターの今後の展望や方針について、お伺いできればと思います。

加 計：教育研究機関としての立場から、地域社会あるいは国内外におけるボランティアのあり方を探求し、21世紀の福祉社会の実現に向け、大学としてボランティアに携わる機能を高めて行く必要があります。

①学術研究の機能②人材養成・研修の機能

カタ州やケララ州、それからタミルナドゥ州など。そのほかにもインドネシアやモンゴル、ネパール、韓国、スリランカなど…主にアジアの大学が良いと思いますよ。

保 積：菅波先生からも、今後の当ボランティアセンターへの期待や要望について、ご意見をいただきたく存じます。

菅 波：10年前、このボランティアセンターを立ち上げられた時は、普通の世界におけるボランティアのあり

方で良かったと思います。すなわち、とにかく人を助けてあげましょう。困った人がいるから助けましょう…という考え方ですね。

ところが今、日本は世界有数の安心安全を掲げる、最も「天国」に近い国になってしまいました。では、そこの住人が求めているものは何かというと、自己表現…自分の存在感をどう表現するかということを、みんな求めているのではないかと思います。

日本が世界に誇る「オタク文化」などは、その典型的な例だと思います。経済的に発展した日本という素晴らしい国に住んでいる人間は、もっと自分の個性が發揮できる場を欲しがり、自分が生きている証を求めたがるのです。幸せな人が、より幸せを感じるためににはどうすればいいのか？そこを目指すのが、より成熟した国家のボランティアセンターのあり方ではないでしょうか。

そういう意味では、今回の東日本大震災の関連で、たくさんボランティアが参加している状態こそが、過去10年間のボランティアセンターの総括だと思います。もう次は、第2段階のボランティアセンターを目指してもいいでしょう。

保 積：ありがとうございました。それでは、これまで加計美也子センター長、菅波茂AMDAグループ代表、お二人による特別対談を終わらせていただきます。



ボランティアセンター10年の歩み

2000.4 吉備国際大学福祉ボランティア学科設置

2000.10 鳥取西部大地震災害復旧ボランティア実施



2001.9 高梁学園(現・順正学園)
ボランティアセンター開設



2002.9 「大学・学生ボランティアセンター
研究会議in京都」参加

2003.10 「災害復旧ボランティアセミナー」開催

2004.5 障がい学生支援(要約筆記)開始

2004.6 AMDA・吉備
国際大学
ボランティア
センター連携
プロジェクト「イラク救援ボランティア」実施



2004.7 「ボランティアフォーラム～明日の
ボランティア教育を考える」開催

2004.8 國際協力実習(インド・プーネ市)開始



2004.9 玉野市での台風16号
高潮災害復旧ボランティア
実施

2004.11 新潟県中越地震被害に対する募金活動

2005.1 スマトラ島沖大地震被害に対する募金活動

2005.7 玉野市での台風16号高潮被害者に対する
アンケート調査実施

2005.9 宮崎県での
台風14号
豪雨災害復旧
ボランティア
実施



2005.10 パキスタン北東部大地震被害に対する
募金活動



2006.2 新見市千屋地区での
雪かきボランティア実施

2006.4 高梁学園と公設国際貢献大学校が
連携協定締結

2006.6 インドネシア・ジャワ島中部地震被害に
対する募金活動

2006.8 高梁市災害ボランティアセンター研究会発足



2006.9 延岡市での台風13号竜巻災害復旧
ボランティア実施と募金活動

2006.10 岡山発国際貢献推進協議会加入

2007.4

学園あいさつ運動
開始



2007.7 新潟県中越沖地震被害に対する募金活動

2007.11 第19回全国生涯学習フェスティバル
「まなびピア岡山2007」参加



2008.5 中国・四川省大地震被害に対する
中国人留学生会との合同募金活動

2008.5 ミャンマー・大型サイクロン被害に
対する募金活動

2008.9 高梁市災害ボランティアセンター設置・
運営マニュアル及び手引き作成

2008.12 学生×ボランティア向上プロジェクト
「サンタ大作戦!!!」開始



2009.3 「吉備国・順正祭りin全国都市緑化
おかやまフェア」参加



2009.5 吉備国際大学学生ボランティア連合組織
「吉備国際大学ボランティアプレート
(KVP)」発足



2009.7 防府市豪雨災害に対する募金活動

2009.8 美作市・兵庫県佐用町での
台風9号豪雨災害復旧ボランティア実施
と募金活動



2009.9 高梁市災害ボランティアセンター研究会
「災害ボランティアセンターワーク
ショップ」開催

2010.1 中南米・ハイチ大地震被害に対する
募金活動



2010.5 宮崎県での口蹄疫被害に
対するボランティア実施と
募金活動

2010.9 大学ボランティアセンター学生スタッフ
研修合宿実施

2011.1 「中山間地域ネットワーク推進シンポジ
ウム」参加

2011.3 東日本大震災被害に対する募金活動、
救援物資の募集・仕分け、東日本大震
災被災者支援プロジェクト実施

2011.10 順正学園ボランティアセンター開設10周年
記念特別講演「人と人との絆」(AMDA
グループ代表・菅波茂氏)開催

関係団体からの祝賀メッセージ



高梁市長 近藤 隆則 様

順正学園ボランティアセンター開設10周年、誠におめでとうございます。

この間、高梁市民と協働したボランティア活動はもとより、災害復興支援や国際貢献の活動を通して大きな成果を上げられており、その取り組みに改めて敬意を表します。

今年3月に発生した東日本大震災にみられるように、復旧・復興に際してはボランティアが重要な役割を果たしており、今後、大学ボランティアセンターの役割も今以上に大きくなっていくものと思います。

若い力に期待するとともに、順正学園ボランティアセンターの益々のご発展をお祈りいたします。



延岡市長 首藤 正治 様

順正学園ボランティアセンターが、開設10周年を迎えたことに、心からお慶び申し上げます。

本市におきましては、九州保健福祉大学のボランティアセンターを中心とし、まちづくりの様々な場面や災害時において、多くの学生がボランティア活動に参加するなど、地域振興の一翼を担っていただいているところです。

本市いたしましても、今後とも学生によるボランティア活動の情報発信を進め、地域と学生との交流を図ってまいりたいと考えています。

結びに、順正学園ボランティアセンターが、今後ますますご発展いたしますことを祈念申し上げまして、お祝いの言葉とさせていただきます。

岡山県ボランティア・NPO活動支援センター(ゆうあいセンター)所長 小川 孝雄 様

順正学園ボランティアセンター開設10周年おめでとうございます。

加えて、ゆうあいセンターが行う岡山県内の学生交流事業にいつも積極的にご参加をいただいていること、厚くお礼申し上げます。

今、社会的に凶悪な犯罪が起るたびに私たちは言葉を失います。しかし、もじ心を許せる友や家族、そして誰かの役に立っていると実感できる場があったならば、私たちは、さらにより良く生きることが出来るのではないかと思います。そこに、次代を担う学生ボランティアセンターの大きな意味があると思います。

地域社会に、海外へと広がる順正学園ボランティアセンターの益々のご発展を心から祈念しております。



国際ソロプチミスト高梁会長 池田 元子 様

この度、順正学園ボランティアセンターにおかれましては、開設10周年をお迎えになりましたこと、心からお慶び申し上げます。

私ども国際ソロプチミスト高梁もボランティアを第一義とする奉仕団体でございます。今後も、お互い手を取り合って活動を続けてまいりたいと思います。

国際ソロプチミスト高梁は2009年、吉備国際大学にシグマソサエティという奉仕専門クラブを設立させていただきました。岡山県内に5つのクラブがあり、毎年交流会を開催しておりますが、今年度は2月に貴センターを中心に開催させていただく予定です。

最後に、貴センター開設10周年と、そのご発展を祈念させていただき、お祝いのご挨拶とさせていただきます。



岡山西ロータリークラブ会長 松本 忠 様

順正学園ボランティアセンター開設10周年、誠におめでとうございます。

順正学園の社会に有為な人材を養成するという「建学の理念」実現に向けて、他大学に先駆けてボランティアセンターを設置され、教職員・学生の方々が災害復興支援・地域貢献・国際貢献・障がい学生支援に積極的に取り組み、又、学外のボランティア要請にも協力・支援を展開されていることは、社会から高い評価に値する活動でございます。

我々、岡山西ロータリークラブでも国際ロータリーの方針である「奉仕の理想」の実現に向けて、ロータリアン（会員）一人ひとりが、個人として、又、職業人として、地域社会の一員として活動しております。

その意味からも、岡山西ロータリークラブとして、貴センターの学生皆様方が将来のリーダーとなつていただけるよう支援させていただきます。

最後になりましたが、貴センターの益々のご活躍を祈念いたしております。



高梁ロータリークラブ会長 川崎 正志 様

順正学園ボランティアセンター開設10周年おめでとうございます。

貴センター開設の年には、9.11同時多発テロに世界が震撼した年であり、その後も世界的な社会不安が広がっております。日本においては東日本大震災、地球温暖化と思われる異常気象による災害の発生、また少子高齢化問題等、我々が今まで経験のない問題に直面しており、こうした状況の中でボランティア活動の重要性が認識されています。

将来を担う青少年がボランティア活動に参加することは、彼らの人生の貴重な体験となることだと思います。我々高梁ロータリークラブもカンボジアをはじめ、国内外での奉仕活動を行っており、お互いに切磋琢磨し、思いやりのある社会を作るため頑張りましょう。貴センターの益々のご発展をお祈りします。



高梁市社会福祉協議会会長 内田 親秀 様

順正学園ボランティアセンターが、この度開設10周年を迎えたことを衷心よりお慶び申し上げます。

貴学園におかれましては、全国的なボランティア意識の高揚と活動の必要性が期待される中、福祉ボランティア学科が平成12年に開設されて以来、学生の主体性を尊重し、ボランティア精神の醸成に努められ、平成18年からは本市における災害時のボランティア活動の在り方について研究をされました。

今後におかれましても、多くの人材を社会に輩出され、地域社会に大きな功績を残されますことを期待いたします。

最後に貴センターの益々のご発展と、皆様方のご健勝を心からご祈念申し上げ、お祝いの言葉とさせていただきます。



国際貢献大学校運営機構理事長 (AMDAグループ副代表) 的野 秀利 様

順正学園ボランティアセンター開設10周年、誠におめでとうございます。

加計美也子センター長をはじめ、教職員の皆様、ボランティアスタッフの皆様の弛まぬご努力に、改めて敬意を表します。

本校においては、2004年のイラク復興支援、新潟中越地震、そしてこの度の東日本大震災支援等、国内外の救援ボランティア活動に貴センターが連携して救援活動を行っており、また、海外での国際協力実習を行なう際の危機管理模擬演習を行う等、様々な国際協力分野での連携協力を賜り深く感謝申し上げます。

あってはならないことですが、今後とも国内外の救援活動でともに連携し、国際社会で活躍するボランティアスピリット溢れる人材の育成に微力ながら尽力して参る所存でございます。貴センターの今後ますますのご発展を心よりお祈り申し上げます。

順正学園ボランティアセンター 東日本大震災 被災者支援プロジェクト

被災地・岩手県で活動した吉備国際大学生ボランティア



NETプロジェクト」にボランティアで参加し、津波被害を受けた岩手県釜石市、大船渡市、陸前高田市などに出向いてくれました。最初に、被災地に足を踏み入れた時の率直な感想から話してもらえばと思います。

ボラセン：では、これから、東日本大震災の被災地・岩手県に実際に出向いて、ボランティア活動に携わった吉備国際大学の学生による座談会を始めます。

参加者は…スポーツ社会学科4年・岩田啓佑君、同・山下慎司君、ビジネスコミュニケーション学科3年・榎村大周君、同1年・多田健人君の4人です。

君たちは9月14日から20日までの7日間、岩手県立大学学生ボランティアセンターなどが企画した「いわてGINGA—

NETプロジェクト」にボランティアで参加し、津波被害を受けた岩手県釜石市、大船渡市、陸前高田市などをバスで視察しました。やっぱり海岸沿いの被害がひどく、ほとんど更地になっていて…テレビで見てきた被災地の風景が実際に目の前に広がっていて、愕然としましたね。

2011年3月11日。日本中を震撼させた未曾有の大災害・東日本大震災。日本観測史上最大のマグニチュード9.0を記録し、この地震による津波は、東北・関東地方の太平洋沿岸部に壊滅的な被害をもたらしました。死者・行方不明者は約2万人。この地震と津波は、福島県における重大な原発事故も引き起こし、発生から数か月経った今も、多くの国民の生活を脅かしています。

ですが一方で、被災地には現在多くのボランティアが駆けつけるなど、復興に向けた活動は着々と前進しています。被災地と遠く離れたここ岡山県では、現地ボランティアなどの直接的支援が難しいのも現実。そこで、当センターでは「東日本大震災被災者支援プロジェクト」と題し、主に直接現地に赴かずとも岡山にいながら間接的に行える被災者支援ボランティアを実施することにしました。

今回の特集では、実際に被災地に出向いた学生たちのリアルな声をはじめ、福島県から避難してきた児童生徒の受け入れボランティア、被災地の小中学校への図書贈呈など、震災に絡んだ様々なボランティア活動を紹介していきます。

僕のグループが主に活動したのは、釜石市大畠西地区の仮設住宅でした。内陸で、被害も少なく、住民の方々は復興に向けて頑張ろうとしていたのですが…それでもやはり、被災地独特のマイナスな雰囲気を感じることがありました。

多田：僕もテレビや新聞、インターネットなどで、被災地の惨状は把握していましたが、実際に現地を見た衝撃は比べ物にならなかったです。ただ、震災から半年が経過し、仮設だけコンビニとか新しいお店も出来ていて

…復興が進んでいるのも実感できました。

岩田：僕は反対に…震災から半年が過ぎて、報道も少なくなってきたから、復興もかなり進んでいるんだろうって思っていたんです。でも、実際にこの目で見たら、言葉も出ないっていうか…写真を撮る気にもならなくて。仮設住宅は2年で出なきゃいけないらしいんですけど、それまでに、あの瓦礫の山が全部片付いて、住める状態になるんだろうか？って思いましたね。

多田：視察の時、バスから被災地を見たけど…あまりのひどさに車内がシンって静まり返ってたよね。

山下：現地は本当に破壊され尽くされて…本当に「瓦礫の山」っていう言葉しか思い浮かばないくらい、ものすごい衝撃だった。ここからボランティアをするとして、自分に何ができるんだろうって…とりあえず不安な気持ちでいっぱいでしたね。

でも、岩手に入ってすぐ、街中に「支援ありがとう」って書いた看板がたくさん

座談会！！

いわて
GINGA-NET
プロジェクトに
参加して



立ってて。それを見た瞬間、来て良かった…いや、僕はここに来なきゃならなかつたんだ…って気持ちが沸き起こってきました。

ボラセン：なるほど。4人、共通して言えるのは、写真やニュースで見るのは違う現地の惨状を目にして、やっぱり衝撃を最初に感じたっていうことでですね。では、実際に現地で、どんな活動をしたのか教えてください。

岩田：基本的には、危険な場所から離れた場所にある仮設住宅でのボランティア活動がメインでした。その仮設住宅で、住民の方たちの繋がりを手助けする架け橋になろうと「お茶っ子サロン」っていうサロン活動を、皆で開いたんですよ。

山下：そうそう。「お茶っ子サロン」っていうのは名前の通り、お茶やお菓子を出して、仮設に住む人の繋がりを増やそうというサロン活動で。僕らが岩手に行っていた期間中は約200人の学生が参加していて、大体1グループ7~10人に分かれて担当地域に出向きました。公民館のような場所がサロンとして提供されていたので、そこでチラシを作ったり、仮設住宅を訪問しては、住民の皆さんを呼び込みました。

仮設住宅に住まう面々にも変化があつたので、どこの仮設に誰が住んでいるかを自分たちで把握しながら…世間話とかする中で、住民のニーズを拾い上げて、担当のボランティアセンターに伝えるのも重要な活動の一つだったよね。

スポーツ社会学科4年・岩田 啓佑君

岩田：僕と山下君が釜石市大松地区という場所で一緒に活動しました。
横村：僕は釜石市の大畠西地区です。
多田：僕は同じく釜石市の大畠南地区に行きました。

ボラセン：なるほど。4人、共通して言えるのは、写真やニュースで見るのは違う現地の惨状を目にして、やっぱり衝撃を最初に感じたっていうことでですね。では、実際に現地で、どんな活動をしたのか教えてください。

岩田：基本的には、危険な場所から離れた場所にある仮設住宅でのボランティア活動がメインでした。その仮設住宅で、住民の方たちの繋がりを手助けする架け橋になろうと「お茶っ子サロン」っていうサロン活動を、皆で開いたんですよ。

山下：そうそう。「お茶っ子サロン」っていうのは名前の通り、お茶やお菓子を出して、仮設に住む人の繋がりを増やそうというサロン活動で。僕らが岩手に行っていた期間中は約200人の学生が参加していて、大体1グループ7~10人に分かれて担当地域に出向きました。公民館のような場所がサロンとして提供されていたので、そこでチラシを作ったり、仮設住宅を訪問しては、住民の皆さんを呼び込みました。

仮設住宅に住まう面々にも変化があつたので、どこの仮設に誰が住んでいるかを自分たちで把握しながら…世間話とかする中で、住民のニーズを拾い上げて、担当のボランティアセンターに伝えるのも重要な活動の一つだったよね。

多田：僕が行った仮設住宅は、結構、皆さん互いに仲が良くて。僕たちボランティアが活動していない時にも、自主的にサロンを開いたりして、日常的に人と繋がりを大事にしていました。そんな中で「被災者がいるからといって、色々な行事やイベントを自粛しようっていう動きは止めてほしい。何もしないのが一番ダメだ」という声をよく聞きました。

横村：僕が行った地区では、仮設住宅に住まわれている方がお年寄りばかりだったせいもあるかもしれません、最初の頃は、少し雰囲気がよそよそしい感じがしましたね。でも、最終日にはとてもたくさん的人が来てくれて、いっぱいおしゃべりもできて。「ああ、やって良かったな」と思いました。

ボラセン：お茶っ子サロンの他には、どんな活動があったのかな？自分たちで工夫した活動とか。

多田：岩手のボランティアグループから支給される物資の中に、梅干のパックがあって。僕らのグループの中から「配ろう」という声が自然に上がって、仮設住宅一戸一戸を回りながら、1パックずつ配って歩きました。おじいちゃん、おばあちゃんに好評でしたね。

山下：岩田君と僕が行った地区では、足湯をやりました。

岩田：物資の中に子ども用のプールがあって、ポットとやかんでお湯を一回一回沸かして、プールに注いで足湯にするんです。他にもカキ氷を作ったり、ハンドマッサージをやったり、サロンにお客様を呼ぶ工夫は色々と試しました。

横村：僕の地区は最初、人の集まりが悪かったので、外回りの回数を増やしました。とりあえず家々を回って、周りのゴミを拾つたり、住民の方の買い物を手伝つたり。うちも鍼とマッサージができる子がいたんで、その子が鍼をやつたりして。

岩田：お茶を出している間中、ずっと喋り続けてたおばあちゃんがいたんです。たぶん仮設には、こういうふれあいの場がないんだろうなって思いましたね。中には、自分以外の家族を全員、津波で亡くされてる人もいたりとか…下手な言葉を掛けられなくて。ただ、楽しい時間を一緒に過ごせたらっていう思いで、精一杯でした。



多田：サロンに行きづらい人、足が痛くて行けない人とか結構いて。そういう人のお家には直接、何人かでお邪魔させていただいて、そこで話をしたり、肩揉みをしたりして交流しました。

ボラセン：学生ボランティア同士のふれあいとかはどうでした？学生同士の中で、何か得たもの、学んだことはありましたか？

山下：一番、学んだことは…団結力ですかね。チームとしてやる意味は何なのか？どれだけお互いに助けられているか？毎日毎日、反省点を出し合って。で、次はこうしようとか…人数が多いと、自分に無い意見が出たりして、すごく仲良くなれました。仲良くなればなるほど、学生らしい明るさも生まれてきて…それがすごく良かったって思いますね。

岩田：全国のまったく違う場所から集まってきたボランティアと接していると、自分にないもの…例えば、行動力や気遣いといったものを持っている人たちがたくさんいて。サロンでいろんな人と話す中で、自分に何が足りないのかを見つけることができました。それが自分の成長に繋がったって思います。

あと、集団だから、コミュニケーションを取らないといけない。こうしたコミュニケーション能力の向上という意味でも、今までとは全然違うものが学べたと思います。

多田：実際に、ボランティアとして活動したのは3、4日くらいだったんですけど、すごく長い間、多くの人と仲良く付き合えたっていう感覚がありました。みんなボランティアとして何かの助けになりたいっていう、同じ目的で集まっているから、年齢や学年、立場の壁を超えて仲良くなれたんだと思います。

横村：サロン活動が終わったら、全員が体育館に帰って反省会をするんです。そこで、他のチームとも交流したりするんですよ。で、他のチームがこういうことをやったんだよって言えば、じゃあうちもやろうか？みたいな感じで活動の幅が広がっていく。自分たちのチームだけで活動するんじゃないなくて、その体育館にいる皆で活動しているっていう一体感がありました。

岩田：でもさ…最初は「自分に何ができるんだろう」と不安ばかりだったけど、単純に楽しかったよね？

山下：うん。僕らの地区には子どもが数人いて、物資の中にあったミニカーとか粘土のおもちゃを持って行って遊んだよね。女の子とか「私がチラシを作ってきてあげる」とか言って、すぐいい子たちだったよな。

多田：僕の地区の子どもたちは、戦隊モノのごっこ遊びとか、サッカーとか体を動かす遊びが中心だったかな。トンボを探るのが上手い子がいて、5分くらいの間に10匹くらい捕まえてたりして。

岩田：サロンに来てくれるおじいちゃんが「これ食べな」って、お菓子を持って来てくれたりとかもあったし。玄関先で漬物とかも食べさせてもらったよ。あと、地域の人がボランティアのお礼について、その地区的伝統芸能みたないな踊りを披露してくれたじゃん？歌を歌ってくれたりとか…温かさを感じたよね。

山下：少しでも…明るくしたくて、バスの中でも盛り上がって。ま…学生の僕たちが暗かったら、どうにもなんないしね。

多田：被災に関する暗い話でも、向こうは意外に笑い話にしちゃって。「もう、半年経ったから」って…本当に強いなと思いました。

ボラセン：本当にいい経験ができたんじゃないでしょうか。最後に、自分たちの中でボランティアに行く前と行った後では、何が変わりましたか？

山下：変わったことですか？そんなに大きく自分が変わったとは思わないんですけど…やっぱり、明るく人と話すことは絶対、欠かしてはいけないんだって確信しました。被災地に行ってみて、そのことを本当に強く感じました。

助け合いは絶対に必要だし、いろんな仲間を増やして、次に会った時に「また、行こうやあ」って言える関係を作る。そういうのって、どこに行っても大事なんじゃないかなって思うんです。そこをまだ、自分は分かってなかつた。

岩田：全国から集まったボランティアの皆と話してみて、

なんかこう、自分がすごいちっちゃな存在だっているのを、

実感したっていうか。でも、だからこそ、今自分がやりたいことが何なのかとか、明確になったし。あまり、ボランティアとは関係のないところですけど…

多田：サロンでお年寄りと話していくも、話が途切れたりすることもあるって、なかなかコミュニケーションが取りづらかったんです。でも、自分が思っている本音とか、過去の話を率直に話してみると、相手も意外に本音で話してくれて。怒ったり、反対意見なんかも出ますけど、本音で話すことの重みが、よく分かつたっていうか。今まででは、そんな本音で話す雰囲気になることが、あまりなかったから…逆に「もっと元気出せ！」と、励まされたりもしました。これから先の未来を作っていくのは、君たち学生なんだからって。

横村：僕が行った地区は、少しボランティアに対する態度がよそよそしかったんですけど、こちらから熱心に声をかけていくことで、少しずつ反応が和らいでいました。

そんな中で、大切だなって実感したのは「やりきる感」っていうんですかね？あの人がお茶を出してるから、僕は外回りをして来よう。じゃあ、僕はチラシを作ろうか…っていうチームプレーの重要性を学びました。チームの中では、一人一人が責任を持って、一つのことをやりきると。そういう部分が自分の中でも変わってきたのかな。

ボラセン：それぞれに変わった部分が、一つでも二つでもあったっていうことは、本当に素晴らしいことだと思います。ありがとうございました。



図書収集ボランティア

本とメッセージで「被災した子どもたちを元気付けよう!!」



全校生徒に図書収集を呼びかけてくれた高梁中学校の生徒会執行部のメンバー

の力強いメッセージや、可愛い動物やアニメキャラクターのイラストが、一枚一枚に丁寧に描かれています。

高梁中学校では、生徒会執行部のメンバーが全校生徒に呼びかけて集めた48冊の小説や絵本、児童書などを、10月末に当センターに贈呈。生徒会長の3年三村恭範君(15)は「本とともに、被災者の皆さんを勇気づけるメッセージが多く集まつたことに感動した。図書収集に協力してくれた皆の意志を被災地に届けてほしい」と話していました。

現在、収集した図書は、小学生向けと中学生向けに仕分けている最中。一冊ずつメッセージカードを貼り付けた後、年明けには高梁市が支援活動を続けていく浪江町役場へ届ける予定です。

10月末、高梁中学校生徒会メンバーから48冊の本を受け取りました。このほかにも高梁市内の小中学校から約1100冊の本が寄せられました



集められたほとんどの本の中表紙には、高梁市の子どもたちから浪江町の子どもたちに向けたメッセージカードが貼り付けてあります



順正学園ボランティアセンターは、高梁市内の小学生から児童書などを募り、東日本大震災で被災した福島県浪江町の子どもたちに贈るための準備を進めています。子どもたちだけでなく、図書を集めていたことを知った一般市民の方々や教職員、大学生の協力もあり、集まった本は約1100冊。ほとんどの本には、子どもたちからのメッセージカードが添付されており、現在、学生スタッフらが「震災で心に傷を負った浪江町の子どもたちのメンタルケアに役立てば」と、年明けの発送を目指して、仕分け作業を進めています。

浪江町の復興支援に出向いた高梁市職員によると、「現地は学校が流されてしまっており、子どもたちが読む図書が圧倒的に不足している」状態。その情報を聞いた当センターは、子どもたちに本を送ることで精神面のケアを図ろうと、高梁市教委を通じて、市内の全小中学校を対象に一人一冊の本の寄付を呼びかけました。

また、ただ集めた本を送るだけでなく、高梁市の子どもたちから浪江町の子どもたちに応援メッセージを書いてもらおうと、メッセージカードも一緒に配布しました。「東北頑張ろう!」「岡山から全力で応援しています」「この本を読んで元気を出してください」といった小中学生

集められたほとんどの本の中表紙には、高梁市の子どもたちから浪江町の子どもたちに向けたメッセージカードが貼り付けてあります

被災地の親子を受け入れる民宿 「百姓屋敷わら」での支援ボランティア

順正学園ボランティアセンターは8月、高梁市川上町内の民宿「百姓屋敷わら」が実施した「和樂(わら)プロジェクト」に参加。ボランティアとして、原発被害から避難して来た福島県の親子連れのケアやバックサポートに当りました。

同プロジェクトは、被災者の方々に「生きる力を育む実践力」を身につけてもらおうと、「わら」が企画。原発事故による放射能汚染被害が広がった福島県内の親子ら25人を同民宿に招いて、放射能から身を守るために食などをテーマに、約1か月の合宿生活を送りました。そこで当センターは、実施していた被災者支援ボランティア「東日本大震災被災者支援プロジェクト」と連動させる形で、吉備国際大学の学生ボランティア約40名を派遣。1グループ3、4人が2泊3日程度で交代し、同所で食事や掃除、農作業等の手伝い、子どもたちの遊び相手など務めました。

ボランティアに参加した当センターの学生スタッフリーダー・野上裕太君(20)は「準備作業は大変だったけど、自分たちのサポートで福島から来た子どもたちが喜んでくれたので、やり甲斐がありました。高梁の自然を満喫してくれたと思います」と話していました。

以下は「わら」のリーダー・船越耕太さん(27)のコメントです。

「百姓屋敷わら」和樂プロジェクトリーダー・船越耕太さんからのメッセージ



和樂(わら)プロジェクトは被災者の明日(未来)を健やかにし、日本全体に元気の和(環)と笑顔を創出することを目的に3.11の東日本大震災後に立ち上がったプロジェクトです。

本プロジェクトは、リーダーである船越、山室顕規(28)の2名が震災を機に東京での仕事を辞め、それまで地元高梁市で営んでいた宿業「百姓屋敷わら」を引き継いだのがきっかけでした。「わら」では長年、全国の子供たちを対象に「生きる力を育む実践力セミナー」を主催しております。その経験を活かし、今回の震災で被災された方々に「生きる力を育む実践力」を身につけてもらうことによって、「前向きに生きる自信」や「やる気と元気」を生み出してください、新しい未来を共に創出していく助け合いの環を繋げるサポートをさせていただいたのです。

4月の立ち上げから2回、宮城県女川町、雄勝町の小学校に炊き出しに出向きました。8月からは、放射能問題が深刻になった福島県から25名の親子の方々を丸1か月、高梁市にお招きし、放射能から身を守る術や食をテーマに、自然をフル活用しながら、生きる楽しさの秘訣を徹底的にお伝えさせていただきました。9月には、同じく福島県で料理教室に招かれ、参加した40人近いお母さん達と新しい繋がりを持つことができました。その後、9月と10月の2回に渡って、高梁の地に新しい親子が食生活を学びに来られ、生き生きとした自信に満ちて帰っていました。

今回、8月に参加してくれた学生ボランティアの皆さんには本当に感謝しています。この新たな繋がりもまた、本当にすばらしい財産だと思っています。今回の震災では多くの人々の命をはじめ、失ったものはとても大きかったと思います。しかし反対に、この震災で何かを感じ、得たものもたくさんあるはずです。私たちはその尊い命の上に今こうして生かされているということを忘れてはなりません。学生の皆さんには「若さ」という未知数で無限の可能性を秘めています。これからもどんな小さな事もいいですから、本気で取り組んでみて下さい。必ず想いは具現化します。本当にありがとうございました。

吉備国際大学 女子サッカー部



高梁市内に転居されて来る被災者の方々の入居先を大掃除!!

吉備国際大学女子サッカー部は7月14日、東日本大震災の被災者が入居する市営住宅(高梁市成羽町)のボランティア清掃を実施しました。部員たちは、着の身着のまま転居してくる被災者のために、高梁市で気持ち良く過ごしてもらおうと、精一杯のもてなしの気持ちで清掃に汗を流しました。

同住宅には、福島県いわき市の1世帯5人が転居。この日はそれに先駆け、4年生部員6人が約2時間かけて、台所や和室などの室内外を清掃しました。

部員たちは高梁市の職員らから説明を受けながら、風呂やトイレの水回り、ベランダ、玄関先などを丁寧に清掃。クモの巣取りやワックス掛けなど、隅々まで行き届いた清掃を心がけていました。部員の太田真由香さん(21)は「暑くて、すごく大変だったけど、転居してくる被災者の方たちに気持ち良く過ごしてほしいという一心できれいにしました。また、時間の都合がつけあ活動したいです」と話していました。

高梁市によると、同市には11月上旬現在、福島、宮城の両県から、22世帯、70人が市営住宅などに避難して来ているとのことです。



台所などの水回りも丁寧に清掃しました

九州保健福祉大学ボランティアセンター 災害ボランティアへの挑戦!!

震災ボランティアを思う



九州保健福祉大学ボランティアセンター
副センター長
山崎 きよ子

「2011.3.11」は最も辛い歴史上の日になっていくのでしょうか。この震災を経験して、日本人のものの考え方少し変わったと言われます。私の年代であれば1995年1月に起きた阪神淡路大震災も、少なくとも私のものの考え方を大きく変えた出来事でした。

当時、私はまだ30歳代で、これから少しづつ家計に余裕が出来たらこんなモノを買おう、あんなモノで部屋を飾ろうという夢を持っていました。しかし阪神淡路大震災で見たものは、私がこれから揃えようと夢に思っていたモノが一瞬にして灰燼に帰す場面でした。モノより人との出会い、その日々の大切さを心から理解したのでした。今度の大震災では、さらに人々との助け合いの大切さ、負けない心を学びました。

実は私の住んでいる延岡市は、昔から台風銀座と呼ばれ、毎年のように大きな台風の直撃を受け、甚大な災害を受けてきたところです。ここ数年、大きな台風は来ていないのですが、その時期になりますと不安が募ります。

特に、2005年に襲った台風14号は、私の実家の少し上流の高千穂鉄道（当時）の鉄橋が遙か1km下流に流されるという物凄さで、実家も天井近くまで水没、半壊となり、東京や宮崎市から急遽帰省した私の兄弟、家族も含め、全力で復旧にあたりました。地区全体が災害に遭うと、まずは自分のうちの片付けが優先し、隣同士で助け合うことが出来ません。勢い家族を頼るので

すが、家族がない、あるいは帰ってこられない高齢者はどれだけ大変だろうかと、今回の大震災を他人事と思えない気持ちで見ておりました。

そこでボランティアが必要なわけですが、自分が災害に遭った立場からしてみると、出来たら誰もが人の世話にはなりたくないのです。出来れば自分や、自分の家族だけで解決したいと思っているけれど、出来ないからボランティアに頼むのです。ボランティアは良いことをしているという自己満足や優越感ではなく、今まで普通に生活をしていた人が、人の世話になる心苦しさを抱えて支援を受けていることを忘れてはいけないと思います。

災害は、人々を当たり前の日常生活から、突然にして非日常生活に突き落とします。頼りの人を亡くし、嘗々と築いてきた財産や思い出のものを奪っていきます。ボランティアに求められるのは、被災した人々に寄り添い、辛さを分かち合う気持ちだと思います。今後ともボランティアは、ますますその重要性を増すのですが、私たちがそれらに参加し学ぶことは、このようなことではないでしょうか。



延岡市を襲った2005年の台風14号は、街中に甚大な被害を及ぼしました

2004年4月に誕生した九州保健福祉大学ボランティアセンター。設立8年目を迎えた今年は、やはり高梁キャンパスと同様、東日本大震災関連のボランティアに追われた一年でした。

しかし、同ボラセンは設立以来、さまざまな災害ボランティアに取り組んでいます。「台風銀座」とも呼ばれる宮崎県では、台風や竜巻による被害が頻発し、その度に学生たちがボランティアに汗を流してきました。また、2010年に猛威を振るった口蹄疫被害に対しても、この災害ボランティアでの経験を生かして、的確な活動ができたと自負しております。

これまでに、こうした数々の災害を乗り越えてきた同ボラセン。本年度の東日本大震災関連ボランティアをはじめ、その挑戦の軌跡を振り返つてみようと思います。

東日本大震災支援活動～ 延岡市の兄弟都市・福島県いわき市へ送る救援物資の仕分けボランティア

九州保健福祉大学の学生は東日本大震災発生直後の3月下旬から、延岡市の兄弟都市・福島県いわき市を支援しようと、同市へ送る救援物資の仕分けボランティアに参加しました。

延岡市などが市民らに呼びかけて集まった毛布や日用雑貨などの救援物資は、同市の消防署にいったん収集。同大のボランティアサークルに所属する学生スタッフ約10人が、8日間にわたって仕分けを行いました。

学生たちは、大量に寄せられた物資の個数や種類を一つ一つ確認しながら、段ボール箱に詰め替え。「宮崎で発生した口蹄疫では、全国の皆さんのお世話になりました。今度は私たちが皆さんを励ます番です」「糸を大切に」などと書いた応援メッセージを物資に添えるなどして、被災地を励ます気持ちを忘れずに作業に汗を流しました。

作業に参加した臨床福祉学科4年河野まどかさん（21）は「作業した日は平日でしたが、たくさんのボランティアが来ていて驚きました。物資も思った以上にたくさん届いていて、詰め替え作業は大変だったけれど、これが被災者の方の役に立つと思うと頑張りました。貴重な時間だったと思います」と話していました。また、こうした仕分け作業と平行して、募金活動も隨時行いました。



福島県いわき市に送るために、大量に寄せられた救援物資を段ボール箱に詰め替える九保大的学生



災害ボランティアを通じて学んだこと

九州保健福祉大学臨床福祉学科4年 細井 真理さん

宮崎県に来て4年間、これまで様々なボランティアに取り組んできました。振り返ってみると、宮崎県では、口蹄疫や鳥インフルエンザ、新燃岳の噴火が立て続けに起こったため、ボランティアの内容の大半が災害に関するものでした。なかでも、忘れないのが、口蹄疫です。今まで経験をしたことのないものだけに、発生当初は困惑ましたが、義援金や消毒ポイントでの呼びかけ、消毒促しのチラシ配布等、身近で出来ることを学生スタッフと共に考え、取り組みました。口蹄疫が終息した後も、岡山県の吉備国際大学で開催されたボランティアシンポジウムに出席し、活動内容の発表や、意見交流を行いました。

これらの活動が出来たのも、周りの温かい協力があってこそだと強く思います。特に、義援金に関しては、協力して下さった方々のおかげで宮崎県への貢献に直接繋がったと思います。例え小さな力でも、集まれば大きな力になること。自分たちに出来ることをすれば、いずれ何か意味を持つものになるのだと、再認識することができました。人の力になることができ、やり甲斐があり、自身が成長でき、さらに人との繋がりが増える…そんな機会を与えてくれるのがボランティアだと、私は思っています。

今年は、東日本大震災が起こりました。災害は、いつどこで起こるか予測できません。大学を卒業しても、ボランティア精神を持ち続け、何か役に立てることがあれば積極的に取り組んでいこうと思います。ボランティアで得た多くの経験を、今後も生かしていきたいです。



ニュース&トピックス

平成23年度は、東日本大震災関連のボランティアが非常に多い一年でした。しかし、他にも多方面の分野において、順正学園ボランティアセンターは活動しています。今年度、実施した最新のセンター情報を届けします。

高梁市防災訓練及び災害ボランティアシンポジウム

高梁市と順正学園ボランティアセンターなどでつくる高梁市災害ボランティアセンターは9月12日、同市文化交流館(同市原田北町)で、地震などを想定した防災訓練と「災害ボランティアシンポジウム」を開催しました。

東日本大震災の発生で、大規模災害に対する危機感が高まる中、広く一般市民や学生らに防災意識を持ってもらうのが狙い。市民ら約200人が参加した「東日本大震災から考える地域防災と住民活動」と題したシンポジウムでは、宮城県多賀城市社会福祉協議会の飯田典美会



大規模災害時の地域安全などについて議論した高梁市災害ボランティアシンポジウム長を招き、震災の被害状況や、震災後すぐ設置された多賀城市災害ボランティアセンターの活動などについて講演していただきました。

引き続き、当センターの塙田健二災害復興支援セクション長をコーディネーターに迎え、「地域の安全と災害時の強さとは」と題したパネルディスカッションを開催。パネリストに、引き続き飯田氏のほか、近藤隆則高梁市長、内田親秀高梁市社会福祉協議会会長、春名正敏美作市社会福祉協議会事務局長を迎え、地域全体で防災意識を高めていくことの重要性などについて議論しました。

また、防災訓練では、車内に閉じ込められた人を救助する想定で、市消防本部の隊員4人が、軽乗用車を油圧



約200人の市民や学生が、宮城県多賀城市災害ボランティアセンターの活動について耳を傾けました

カッターなどですばやく切断。車内のダミーを救出するなど、迅速かつ的確な救出活動を実演してくれました。

コーディネーターを務めた塙田セクション長は「地震大国・日本は、基本的に地震への心構えや日頃の訓練が行き届いてる点が特徴であるといえます。だからこそ、今回のような大災害でも、住民が秩序を保ち、お互いに助け合うことができたのだと思います。高梁市でも毎年、災害ボランティアセンター設置のための研究会やワークショップを繰り返し開いています。大災害が頻発する現代では、万が一にも備えておくことが必要ではないでしょうか」と話していました。



地震が起きた想定で、車内に取り残された人の救出訓練を行う消防隊員



出発式で激励される吉備国際大ももパト隊のメンバーら

登校中の小学生らへのあいさつを通じて、見守り活動を行う「吉備国際大ももパト隊」の活躍が目立っています。子どもたちの安全と安心を大学生の立場から守っています。学生たちは毎週月曜日の朝、10人ほどで高梁市内の街角に立ち「おはようございます」「気をつけて学校に行ってね」と児童に優しく声かけ。「地域の安全に一役買って大助かり」と、市民からも感謝の声が上がっています。

ももパト隊は、岡山県警の呼びかけで平成22年に発足した県内の大学・短大による防犯ボランティア組織。吉備国際大では、数年前から高梁市内で独自にあいさつ活動を続けており、今回、その活動の中心だったボランティアグループ「吉備ガーディアンズ」のメンバーが、そのまま同隊に参加することになりました。

4月18日には、JR備中高梁駅前で同隊の出発式が行われ、学生や高梁警察署員、補導員ら15人が参加。学生たちは山田弘高梁署長から激励された後、交差点や橋の脇などに立ち、登校する子どもたちに「おはようございます」と、元気なあいさつを交わしていました。

また、5月17日には、同大の駐輪場で、自転車に「愛錠(あいじょう)」を一と題した「自転車二重ロック周知活動」を実施。授業が終わって、家路に着く学生たちに「自転車のロックは一つだけでは不十分です」「自転車盗難に遭わないよう、二重ロックを心

がけて」と呼びかけながら、ちらしとワイヤー錠などを配りました。



放課後、学生たちに自転車の二重ロックを呼びかけました

高梁警察署の安田齊生活安全課長は「ももパト隊に参加する若い大学生の皆さんには、あいさつ運動などを通じて、もっと安全安心の意識を周囲にアピールしてもらいたい。警察署と連携を図ることで、さらに防犯の輪も広がっていくと思います」と話していました。

学生から一言

吉備国際大ももパト隊に参加して…



吉備国際大学スポーツ社会学科2年
井上 幸紀君

私が吉備ガーディアンズに入ったのは、1年の夏ごろ。同じボランティアセンターの学生スタッフだった先輩に誘われたのがきっかけでした。そして、ガーディアンズの活動に取り組んでいるうちに、ももパト隊の存在を知り、そちらの活動にも顔を出すようになりました。

ガーディアンズでも独自にあいさつ運動をしていましたのですが、最初はとりあえず、何も深く考えずに、ただ小学生にあいさつをするだけでした。でも、何日か小学生に声掛けをしていくと、中に私の顔を覚えてくれている子どもたちもいて、こちらから声を掛ける前に「おはようございます」とあいさつをしてくれ、とても嬉しかったのを覚えています。

あいさつは生活の基本であり、コミュニケーションの一つでもあります。しかもそれでも気持ちが良いものです。この運動を通じて、自分からあいさつができる子どもたちが増えなければ嬉しいし、私たち大学生自身も運動を通じて、子どもたちの安全を見守ることに貢献できればと思っています。

私自身、ボランティア活動に取り組むようになって、一緒に活動する仲間も増えました。何より、今までは困っている人がいても「誰かが助けるだろう」と他人事のように考えていましたが、今では自分から進んで人を助けることの喜びを知れたと思います。

順正学園ボランティアセンター開設10周年記念特別講演「人と人との絆」

順正学園ボランティアセンターは10月13日、同学園国際交流会館（高梁市伊賀町）で開設10周年を記念した特別講演「人と人との絆」を開きました。講師の菅波茂AMDAグループ代表が、国際医療ボランティア・AMDAの活動やボランティアの在り方などについて話し、学生ら約160人が熱心に聴講しました。

2001年9月に開設した当センターの10周年を記念するプログラムの一環。はじめに加計美也子センター長が「多くの皆さんのおかげで順正学園ボランティアセンターが10周年を迎えることができました。これからも、さらなるボランティアの輪を広げていきたい」とあいさつ。

菅波代表は、AMDAによる東日本大震災や世界各国での医療ボランティア活動を交えながら「ボランティアの援助を受ける側にもプライドがあるということを忘れてはいけない」「ボランティアをする側とされる側の共存共栄を可能



学生たちにボランティアの心構えなどを講演してくださった菅波代表

にするのは、パートナーシップを基にしたお互いの尊敬と信頼関係」など、ボランティアを行う際の心構えなどについて、学生に熱心に語りかけてくださいました。

九州保健福祉大認知症サポーター養成講座



九州保健福祉大の学生100人が参加した認知症サポーター養成講座

の一環として、全国で養成講座を開いています。今回の講座には、社会福祉学部の学生を中心に100人が参加しました。

講座では、講師が認知症の症状のほか、患者や家族の心理状況などを説明。認知症に関する詩の朗読などもあり、学生たちは、日々進化する認知症の最新情報を耳を傾け、認知症への共感と理解を深めています。

最後に、受講者全員にオレンジ色のリストバンドを配布。このバンドを受け取ることで、認知症サポーターとして認められ、今後、地域で活躍することができるようになります。



九州保健福祉大学ボランティアセンターは10月22日、同大講義室で、初めての「認知症サポーター養成講座」を開催しました。

認知症サポーターとは、認知症について正しい知識と理解を持ち、患者本人やその家族の方が地域で暮らしやすくなるような支援を行うボランティア。国がキャンペーン

国際協力実習事前研修会in公設国際貢献大学校

吉備国際大学の学生8人は7月30日、公設国際貢献大学校（新見市）を訪れ、国際協力実習でインド・プーネ市を訪問する際の事前研修会に参加しました。



インドでの国際協力実習に臨む前に、公設国際貢献大学校で事前研修に取り組む学生たち

この日、事前研修会に参加したのは、社会福祉学科4年・浜田裕也君、同・藤井祐也君、同3年・中村友美さん、国際社会学科3年・金元麻弥さん、環境経営学科3年・岡本早織さん、社会福祉学科2年・大久保綾乃さん、同・小野槻子さん、同・登喜望さんの8人。同大学校の的野秀利校長から、海外生活の心構えや危機管理の在り方などを、真剣に学んでいました。

8人はこの研修を受けた後、国際協力実習として8月7日からインドに出発。現地の大学院に受け入れてもらいつつ、スラム街の子どもたちの教育・生活支援を行うNGO活動などに参加し、同21日に帰国しました。

吉備国際大短大部によるネイル&ハンドマッサージボランティア



岡山市の岡山クリニックモールで開かれたイベントで、来場者に無料でネイルとハンドマッサージを施す吉備国際大短大部の学生

吉備国際大学短期大学部総合美容専攻の1、2年生約10人は10月10日、岡山市にある岡山クリニックモールが主催する「第3回感謝祭10・10」に参加し、来場者に無料でネイルとハンドマッサージのボランティアを行いました。

晴れ渡る秋空の下、訪れた約180人にネイルアートとハンドマッサージを実施。子どもやお年よりは、きれいに彩られた爪に目を輝かせていました。また、学生たちにとっても、

日頃の学びの成果を地域の方々に知っていただく良い機会になりました。

このイベントは昨年から、本専攻の学生がボランティアで参加しており、大変ご好評いただいております。特に今年は、東日本大震災の復興支援チャリティーイベントとして開催され、ネイルとハンドマッサージのブースでも被災者支援の募金活動が行われました。

センター報告

平成22年度順正学園ボランティアセンター活動報告

高梁キャンパス

1. 災害復興支援セクション

●宮崎県での口蹄疫被害に対する募金活動●高梁市災害ボランティアセンター研究会「災害ボランティアセンターワークショップ」●東日本大震災被害に対する募金活動●東日本大震災被害に対する救援物資搬送と仕分け作業

2. 地域貢献セクション

●高梁市・地域住民等との合同ボランティア活動(本町地区「町家通りのひな祭り」、栄町商店街「手作り遊び教室」、わくわく子どもフェスティバル、御前神社秋季大祭など)●新入生歓迎ボランティア(クリーン作戦&市内案内)●要請組織へのボランティア派遣●食品衛生セルフクリーン作戦・一日保健所長(学生スタッフが拝命)●小学生等登下校時の声かけ運動●第11回ボランティア実践発表シンポジウム●学生×ボランティア向上プロジェクト「サンタ大作戦!!!」●女子サッカー部員による雪かきボランティア

3. 國際貢献セクション

●国際協力実習(インドにおけるボランティア活動)●国際協力実習用レクリエーションキットの携帯●国際協力実習研修会(平成23年度向け)講師～NPO法人AMDA社会開発機構アジア事業担当・小林麻衣子さん)●インド・プーネ市のストリートチルドレン支援(エコバッグ、Tシャツ販売等)

4. 障がい学生支援セクション

●ノートテイク支援に関する業務(式典、行事のノートテイク等)●ノートテイカーケイドー養成講座●ICTを活用した情報保障の高度化についての研究

5. その他・活動支援

●「大学ボランティアセンター学生スタッフセミナー2010in京都」参加●大学ボランティアセンター学生スタッフ研修合宿(高梁市川上町・弥高山公園)●「中山間地域ネットワーク推進シンポジウム」参加●学生ボランティアセンター&ボランティアサークル交流会●学園キャンパスあいさつ運動●アルミ缶回収事業●ボランティア情報システム「VISKET」によるボランティア登録及び、活動情報の管理●順正学園・高梁キャンパスボランティアセンター通信の作成・配布

宮崎キャンパス

1. ボランティア研修・講習会

●ボランティア活動オリエンテーション(初めてのボランティア)●介助法講習会

2. 地域貢献・ボランティア参加

●「延岡市防災フェスティバル」参加●「延岡アースデイ」参加●天下一ひむか桜植栽延長地草刈り(延岡アースデイ環境事業)

3. 災害時対応

●宮崎県での口蹄疫被害に対するボランティア実施と募金活動●東日本大震災被害に対する募金活動

4. その他・情報発信

●携帯電話によるボランティア参加システムの構築・案内●宮崎キャンパスボランティアセンター通信の作成・配布●「第11回ボランティア実践発表シンポジウム」参加

順正学園ボランティアセンター賛助会

～ご支援、ご協力感謝申し上げます～

順正学園ボランティアセンターでは平成17年11月より、実際に身体を動かして社会貢献を実践する時間的余裕がない企業や個人にお願いして、賛助・寄付会員になっていただいている。

平成22年度の会員数は法人会員62社・団体、個人会員97人(平成23年3月末現在)。また、2団体より助成金を頂戴し、納入いたしました合計金額は265万893円となりました。

これらの費用は、同センターが実施する災害復旧支援活動、地域貢献活動、国際貢献活動や障害学生支援活動など、さまざまなプロジェクトに有効活用されます。

平成22年度賛助・寄付会員・助成団体ご芳名(順不同・敬称略)

●法人会員

| | |
|------------|----------|
| (株)イマイ | (岡山県高梁市) |
| 松栄 | (岡山県高梁市) |
| (株)能登原商店 | (岡山県高梁市) |
| 蜂谷工業(株) | (岡山県岡山市) |
| 高梁ロータリークラブ | (岡山県高梁市) |

| | |
|-------------|-----------|
| 友野印刷(株) | (岡山県岡山市) |
| 曙警備保障(株) | (岡山県岡山市) |
| (株)九電工延岡営業所 | (宮崎県延岡市) |
| 旭マルキガス(株) | (宮崎県東臼杵郡) |
| (株)テクネ | (福岡県福岡市) |

| | |
|-------------------------|----------|
| (株)山下体育社 | (岡山県岡山市) |
| 中村建設(株)協力会(宏栄会) | (岡山県高梁市) |
| 新見ロータリークラブ | (岡山県新見市) |
| (有)亀屋防災 | (岡山県倉敷市) |
| 医療法人高梁整形外科医院 | (岡山県高梁市) |
| (株)テレビせとうちクリエイト | (岡山県岡山市) |
| 種田和英法律事務所 | (岡山県岡山市) |
| (株)マルミ歯科商店岡山支店 | (岡山県岡山市) |
| (株)ミツボシ | (岡山県岡山市) |
| 社会福祉法人潤真会(特別養護老人ホーム白和荘) | (岡山県高梁市) |
| 社会福祉法人順正福祉会(順正保育園) | (岡山県岡山市) |
| (株)SBC | (東京都品川区) |
| (株)中電工高梁営業所 | (岡山県高梁市) |
| (株)三楽 | (岡山県倉敷市) |
| (株)興洋インテリア | (岡山県岡山市) |
| 仁木鉄工(株) | (岡山県岡山市) |
| (株)大本組岡山支店 | (岡山県岡山市) |
| セコム(株)高梁営業所 | (岡山県高梁市) |
| (有)坂市 | (岡山県高梁市) |
| アイサワ工業(株) | (岡山県岡山市) |
| 医療法人池田医院 | (岡山県高梁市) |
| (株)英陽産業 | (兵庫県神戸市) |
| (株)矢野デザイン事務所 | (岡山県岡山市) |
| (有)アキバ電器 | (岡山県高梁市) |
| (株)栄美通信広島支社 | (広島県広島市) |
| 弁護士法人関西法律特許事務所 | (大阪府大阪市) |

| | |
|-----------------|----------|
| (有)旭空調設備メンテナンス | (宮崎県宮崎市) |
| (有)内倉写真館 | (宮崎県延岡市) |
| (株)協同防災 | (宮崎県宮崎市) |
| (株)JK | (岡山県岡山市) |
| (株)三光設備工業 | (宮崎県延岡市) |
| (株)トーアサイエンス | (宮崎県宮崎市) |
| (株)岸田電業 | (宮崎県延岡市) |
| 宮崎綜合警備(株) | (宮崎県宮崎市) |
| (有)ウエミ商会 | (宮崎県延岡市) |
| (株)南日本環境センター | (宮崎県延岡市) |
| 新田写真館 | (岡山県真庭市) |
| (株)ながと | (宮崎県延岡市) |
| (株)文宣 | (宮崎県宮崎市) |
| (有)タイチ | (岡山県高梁市) |
| (有)森自動車工場 | (岡山県高梁市) |
| (株)グリーン館ミヤハラ | (岡山県倉敷市) |
| (株)トータルデザインセンター | (岡山県岡山市) |
| (株)丸川建築設計事務所 | (岡山県岡山市) |
| 備中開発(株) | (岡山県高梁市) |
| (株)日立ビルシステム中国支社 | (広島県広島市) |
| (株)田中紙店 | (岡山県高梁市) |
| 清本鐵工(株) | (宮崎県延岡市) |
| 旭有機材工業(株) | (宮崎県延岡市) |
| (株)宮崎科学 | (宮崎県日向市) |
| 旭設備商事(株) | (岡山県総社市) |
| モリブン書店 | (岡山県高梁市) |

●個人会員

| 法人本部 | 吉備国際大学 | 吉備国際大学短期大学部 | 順正高等看護専門学校 | 九州保健福祉大学 | 九州保健福祉大学総合医療専門学校 | 一般 |
|------|--------|-------------|------------|----------|------------------|----|
| 16名 | 37名 | 7名 | 6名 | 22名 | 8名 | 1名 |

●助成団体

岡山西ロータリークラブ (岡山県岡山市)

岡山県ボランティア・NPO活動支援センター「ゆうあいセンター」(岡山県岡山市)

※会員の皆様のお名前を掲載させていただいております。掲載が不都合な場合は、削除及び修正させていただきますので、ボランティアセンターまでご連絡いただけるようお願いします。

賛助会加入のお願い

順正学園ボランティアセンター賛助会員(個人)

一口(2,000円)以上の賛助金を納入していくことにより、社会貢献活動を間接的に支援していただく賛助会員(個人)となることができます。

順正学園ボランティアセンターでは、センターが展開する活動に賛同し、協力してくださる方を広く求めております。実際に身体を動かして社会貢献を実践する時間的余裕のない方にお勧めの方法が、賛助会員になっていたたくことです。順正学園ボランティアセンターが実施する災害復興支援、地域貢献、国際貢献、障がい学生支援の各活動など、皆様からの支援金が様々なプロジェクトに有効活用されます。

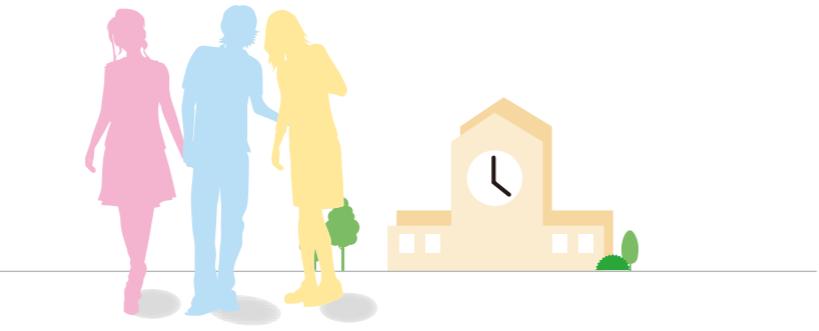
順正学園ボランティアセンター賛助会員(法人)

十口(一口2,000円)以上の賛助金を納入していくことにより、社会貢献活動を間接的に支援していただく賛助会員(法人)となることができます。寄付金制度(10,000円以上)もございます。

賛助会員になるための手続き

ご支援くださる方には、所定の申込書と振込用紙を送付します。

学生のページ



大学ボランティアセンター学生スタッフ研修合宿withゆうあいセンター

順正学園ボランティアセンターの学生スタッフたちは平成23年9月17、18の両日、津山市阿波地域に出向いて、中山間地域の実情を知るための研修合宿に参加しました。岡山県ボランティア・NPO活動支援センター「ゆうあいセンター」らの企画で、昨年に続き2回目。岡山県内4つの大学ボラセン・ボランティア団体から約30人の大学生らが参加し、地域の自然を見学したほか、住民の方から直接お話を伺ったり運動会に参加したりと、中山間地域が抱える様々な課題に真正面から取り組みました。



大学ボランティアセンター 学生スタッフ研修合宿に参加して

吉備国際大学社会福祉学科1年 相山 弥代さん

中山間地域の実情を知るために、私たちは津山市の阿波地域に研修に行きました。阿波は自然が豊かで、人々の繋がりも強く、初めて訪れた場所なのになんだかほっとした気持ちになる場所でした。その一方で、阿波には大きなお店などはなく、公共交通機関もあまり充実していません。生活するには不便なことの方が多い、年々、高齢化や人口減少という問題に悩まされています。

しかし地元の方々は、自分たちのふるさとを大切に思い、もっと活性化させたいという気持ちを持っていました。地元の方々のお話を伺い、私たちもどうすれば阿波をもっと活性化することができるか、また、自分たちでも何か役に立てることはないか、などを真剣に話し合いました。自分たち学生には解決できない問題も多くありましたが、私たちにも出来ることから少しづつでも始めて、少しでも阿波の活性化の役に立ちたいと思いました。

中山間地域は日本中に増えつつあり、どの地域でも阿波と同じように人口減少や高齢化などの問題に直面する可能性があります。自分たちのふるさとを守り、活性化させるためにも、私たち若者の力が不可欠になると、この研修を通して実感しました。学生である自分にできることは多くないかもしれません、自分のふるさとの良さを知り、ふるさとを大切に思う気持ちを忘れず、少しでも活性化に役立てる活動をしていきたいと思いました。



参加したボラセン・団体



初日は、アイスブレイクやゲームで打ち解けた後、阿波地域の良いところと改善すべきところについて真剣にワーク。住民の方に阿波地域の実情や課題について話していましたが、そこで実際に学生に何ができるのかを考え、グリーブと共に発表して全体共有しました。引き続き、2日目の運動会で実施する学生独自の企画について話し合いました。



開設10周年を迎えました。

私たちはこれからも順正学園ボランティアセンターを応援します!!

